

和書（日本・江戸時代ほか）

日本においては、古来から山は神仏の住む聖地であり、各地の霊山は人々の参詣で賑わった。人々は、祀られている神仏の縁起（由緒）や霊験譚を読み聞きし、時には書写を行いながら信仰を深めていった。ヨーロッパから近代登山が移入されて100年余が経った現在でも、講中で霊山に登る姿を見ることができる。

本コーナーでは、日本随一の霊峰、富士山関係の図書を取り上げる。コレクションの内でも、富士山に関わる本の多さは群を抜いており、日本人がいかに富士山を意識してきたかが窺える。富士山にまつわる縁起や霊験譚、江戸時代に大流行した富士講関係の図書などから、日本人と山との関わりを概観する。



29 富士見十三州輿地之全図 船越守愚(清蔵)編 秋山永年図 天保14(1843)

富士山を望める十三州を描き、色刷りで出版した地図。版元は衆星堂。大きさは畳2枚分にも及ぶ。編者の船越守愚(清蔵)(1805-1862)は、長州清末藩士で陽明学者。蘭学や医学にも造詣が深く、吉田松陰とも親交があった。後に秋明倫館の教官となったが、その攘夷思想が一部の藩士の反感を買い、毒を盛られ死去したという。



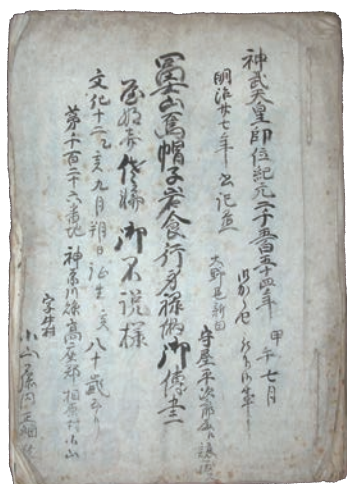
19 富士山略縁起 作者不詳 江戸時代中期

富士山にまつわる短編物語集。本書は、富士山が日本の地に誕生した経緯や、富士山の名付けの由来、かぐや姫の伝説、富士を訪れた聖徳太子の話などが載る。『富士山の本地』とも異なる内容であり、富士山の縁起物の中でも注目すべき書である。仏と神が入り交じって展開される、当時の富士信仰のイメージを伝えている。



20 富士山の本地 作者不詳 昭和5年(1930)

江戸時代に刊行された版本の下巻を書写したもので、文・絵とも丁寧に写されている。富士山に関する中世までの記録・説話を集めた内容で、養蚕起源説である金色姫伝承、富士山におけるかぐや姫の説話、富士権現の靈験譚などを載せる。『富士山の本地』の伝本は少なく、その中でも彩色の写本は極めて珍しい。

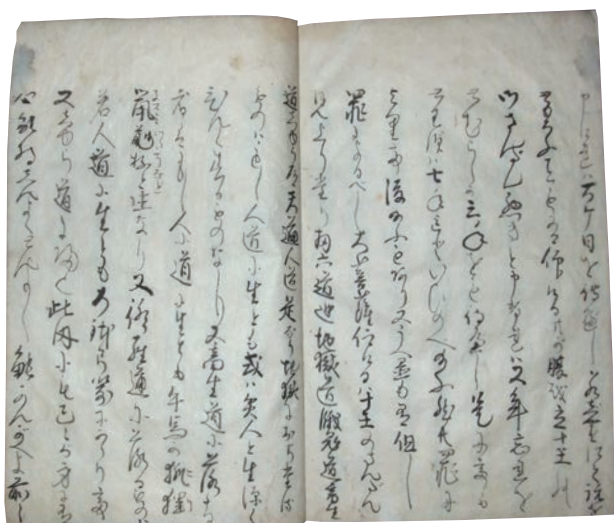
21 富士山烏帽子岩食行身禄御伝書
小山藤内正綱著 明治27年(1894)

食行身禄の生涯を描いた伝記。身禄の誕生から富士山で入定するまでの事績が詳細に記されている。富士講は、一説では江戸幕府の禁令や廃仏毀釈の影響を受けたとされるが、明治期に入ってもなお身禄信仰や富士講組織が根強く存続していたことが知れる。江戸時代から近代にかけての富士講の歴史を見る上で、たいへん興味深い資料と言える。



22 不二行者食行録 田辺豊矩作 大正時代後期

富士講の第六祖である食行身禄（1671－1733）の教えを、享保18年（1733）に弟子の鏡月（田辺豊矩）が筆録した書。身禄が富士山の烏帽子岩で断食をし、一ヶ月余で絶命するまでに語った教義を記録している。本書の富士講信者に対する影響は多大なものがあり、富士講の中興の祖と言われる身禄の書として尊ばれた。



23 富士人穴探験古記 作者不詳 文化3年（1806）

『富士人穴草子』の書写本。物語の内容は、富士山の人穴探しを命じられた仁田四郎忠綱が、人穴の洞内に入り地獄・極楽めぐりを体験するというもの。本書末尾には、この草子を読む者や聴く者への富士権現の利益を約束する句が添えられている。『富士人穴草子』は伝本を多く持つが、本書はそのなかでも異彩を放つ一書である。



24 富士山人穴双紙 赤池氏編 天保3年（1832）

『富士人穴草子』の略伝で、内容は地獄めぐりのみを取り上げる。本書は、富士講の指導者、食行身禄の百回忌にあたる年に、富士の人穴（現富士宮市）で出版された。序には、人穴参詣者から人穴草子を求める声しがきりであったと出版の経緯が記され、当時の富士信徒にとって人穴の物語が重要な意味を持つものであったことを示している。



25 法華富士の記 作者不詳 天保9年(1838)

天保2年(1831)6月、伊豆国玉澤妙法華寺(日蓮宗)の住職であった日桓上人が、霊場富士山頂に宝塔を建立、翌3年(1832)7月には須走口に開会堂を開創し、さらに4年(1833)6月には参詣者の登山の便と無事を祈念して、一合目から頂上までの石室に諸尊を安置するなど、富士山参詣の発展に尽力した姿を描いた書。挿絵も丁寧に印刷されている。



26 富士日記 賀茂季鷹作 文政6年(1823)

江戸時代の歌人である賀茂季鷹(1752-1841)が、寛政2年(1790)に一月をかけて富士山を詣でた際に綴った日記。作者の賀茂季鷹は、当時の京都を代表する文人であり、多くの知識人と交流を持ったほか、有力者などに歌と書を教えた。頭書には自ら付したと思われる注釈が載り、その内容は季鷹の博識を十分に示すものとなっている。



27 国鎮記 高田与清作 江戸時代後期

富士山に関する様々な知識が一冊に集約された書。作者である高田(小山田)与清(1783-1847)は江戸時代後期を代表する国学者で、後の水戸学への影響も指摘されている。本書は、日本各地に存在する地域の名を冠した富士について記され、いかに日本人が富士山に親しみを持ち、崇拝してきたかがわかる。



28 富士野往来 作者不詳 天明4年(1784)

室町時代初期の成立と考えられている本書は、建久4年(1193)源頼朝によって催された富士野巻狩と、そこで起った曾我兄弟の仇討とに関わる書簡文などを収めている。往来物は、手習いの手本や初学者向けの教科書として利用され、特に『富士野往来』は江戸時代に入ってから数種の刊本となって広く普及した。